

るか斯は元祿享保の頃の島主に栖林彈正久基あり山鹿素行の門人にて大石良雄等とも親交あり薩藩の寂老として經世經濟の道に秀で種々畫策せし人なり此の人始めて鹿兒島より領土に下る時遙かに池合より島影を眺られ松ならでは保てぬ島なりと仰せあり着島の日より植林令を發し各村の沿道に並木を植ゑしめしよりこの母樹となりて全島に松の美林を見るに至り近年多量の松材を島外に移出したり久基は琉球より甘藷を本島に傳へたる人にしてからいもの神様として祠を立て祭り島民尊崇せり、明治維新に及本島の山林原野の大半は多く官有に歸せしか殆ど其處分を不平等として緣故拂下を乞ひ今やど地元部落有乃至外何名の共有に屬するもの多く土地一般に底平にして農地に適するところ多きを以て移住民を歓迎して開拓につとめつ、あり林野の面積は將來其半を農地に裂き残る林野は農地の保護たり又普通經濟林として集約的に營む可き

大島本島は平地少なき森林等なるを以て合理的の林業經營を必要となす可く官民協力に努めつ、あるもの、如し沖繩の林制を論ぜんとせば種子島に栖林久基ありし如く同じ元祿享保の頃沖繩の宰相に具志頭親方寒温あり、沖繩古今一千載不出世の經世家にして制度産業教育土木各方面に改革施設至らざるなく薩軍侵入後沈滞悲運に會せる沖繩の窮境を救ひ爾後二百年沖繩の政治家は其の遺策を踏襲して維新に及べり、是より百年既に沖繩には總山奉行の設けあり七十年前巡行奉行を加設し松及びいぬまきの私の賣買を禁じ王府以外の土地にて是等の林木を以て家作する事を禁せり當時より既に森林の漸次減少し來りつ、ありしを伺ふに足る可く寒温沖繩は遠海の孤島若し國內に用材を失は、交通の途開けざる當時に於て是を本土より買入運輸せざる可からざるの大不利益を思ひ自給自足の林業政策を樹立するに至れり

もの外有用樹種を島外にまで求めて造林を計れり、左の樹木は濬用木として伐木を禁じ一方植栽保護をなさしめしものにて濬用の殘りは人民に伐採を許せり

- 檜 木 (Sueki)
- 杉 (廣葉杉)
- さばん (へつかにかき)
- もみ
- 楠 (くすのき)
- よす (いすのき)
- かし木 (楮類)
- い (もつこく)
- 梓 (紫楨)
- 楊梅 (やまもこ)
- からき (肉桂)
- 秋木 (からさんせう)
- 眞竹 (まだけ)
- やまくろき (しまくろき)
- 桑 (はぜ)
- 榎 (くすのはかへ)
- せんたん

此外舊藩時に植栽せしものにて今日に残る

もの「しなあぶらさき」なるみやき等有り御用木は凡て臺帳に記入されたり、山林行政官は寒温の時より地方在勤の山奉行を置き繩に勤番なるものを置き、林産物の買賣を取締り而して小林は是を各社の(現今の字)に分割管掌せしめ保護取締造林一切を擔任せしむ間接には(今の村)總山當りを村には山當りを置き各山務に従事せり寒温は沖繩本島の森林を常備林とし八重山の森林を豫備林として大策を立て森林を有せざる離島に對しては特に沖繩本島の森林地方に其の分擔地を與へたり、沖繩は四面環海、農作物及び住宅潮風に洗はれ被害多きを以て沿岸地方は防風潮林の設備至らざるなく杉並木松防風樹帯あぐん右納よぎやらぶはすのはざり等の沿岸帯となさしめ保安林として必要な森林は拜山なるものと鎮守の神を祭りて嚴に伐採を禁じたれば以後二百年遂に俗をなほ畏敬して相侵すものなし

地馳驅して新なる犯人を得て之を交附せざる可からざる如き制度あり、又罰金を徴して申分は告發者に交はし申分は植林責に當つるあり又一本を盗むもの數十本の植林を命する等の制裁を爲し一方積極的には山勝負なるものを發案し造林手入林道等を春秋一回調査員をして審査せしめ各字を單位として等級を分ち旺なる式を擧げて賞與を行ひ、種々なる除與を混じ競争心を利用して森林の繁茂につとめり

沖繩本島に於ける諸式の發達は到底荒廢に傾ける森林の産物を以て其需要に充つる克はず、單に薪炭及下等雜木用材を産出するに留まり、杉扁柏の用材は凡て本土より移入し其額二百余萬圓に達せり、松材は豊富にして縣外に迄移出するあり、大隅大島諸群島よりは久しく優良なる椎茸を産し、額貳拾萬圓を唱へしが、源木拂底の今日如何程の産出あるべきや

- 第一天然林
- (イ) 海岸林 (主として熱帯林)
 - (ロ) 潤葉樹林 (主として暖帯林)
 - (ハ) 針葉樹林 (主として温帯林)
- 第二期林
- (イ) 落葉闊葉樹林
 - (ロ) 松林及人工林
 - (ハ) 竹葉及草生地
- 第一天然林

遠く本島人類移住前の六百の林相如何なるかば、屋久島、西之表及各地に残存せる鎮守の森に原生的に森林の存置するあり

は琉球松を生じ是又地力の減退と造林上の便宜より大部分松林と化せんとする勢にあり、本弧島に於ける松樹は林業上重大なるものにして、其取扱と利用法を期せざるべからざるものとす

第三竹叢及草生地

本弧島の林野の開墾跡地及衰弱極に達し又は濫伐の害を蒙れる時は、山竹の一類すすき、羊齒類全地を占領し大に林木の生育を害す、種子島、屋久島の海岸大島、諸島沖繩始め各島皆此荒廢山野を有し漸時其面積を増大しつ、あり、こは林業家の忽諾に附すべからざる所にして速に是が處分を計劃せざる可からず

本邦に於ける木材

富士製紙株式會社 水上 生

先頃本邦製紙事業の沿革に就き知る機會を得、茲に貴重誌面を借り大要を左に

抑本邦に於ける人材パルプの製造は明治廿二年王子製紙會社の静岡縣周智郡氣多工場を以て嚆矢となす同會社は更に明治廿二年一月同縣中部工場を建設せしが兩工場共其原料を天龍川沿岸の森林に仰げり富士製紙會社は王子製紙會社に次ぎ明治廿三年一月静岡縣富士郡鷹岡村入山瀬に第一工場を設け明治卅二年第二工場全郡富士根村に明治四十一年に第三工場を同郡加島村に増設し當初富士山麓の繁茂せる樺材を目的とし

あさ、はすのはぎり、もんばのき、もくとらばな、こはていじ、しろよな、でいご、みふくらぎ、はうちはのき、あかてつ、ふくぎ、やらぶ等を生ず、殊にあだん、は天工的保護増殖したりしを以て海岸、河岸、路傍等に大なる面積を占領せり

沿岸より遠く内方まで生ずる熱帯性林木には、くるつぐ、へご、まるはち等の木生半齒、もたま、しろつぐ、したん、しろよなあから、つるあだん、いぬびは類等あり

(イ) 海岸林

海岸林は主として熱帯性植物の播布する地帯にして南部に至るに従ひ其種類を多くし繁茂の状も盛なりとす特に熱帯性植物の微細とも云ふべき紅樹林(マングロブ)は河口地方の沿岸に發育し西表島に於て二百町歩の周圍地を見るべく之は臺灣にて見得べからざる盛大のものにして最北種子島にすらめびるの灌木林の小さきを見るべしめひるぎ、をひるぎ、をうばひるぎ、まやぶしき、ひるぎもどき、ひるぎだまし等は全く海水中に根を張りて生育し、こましまはう、さわふじ、あだん、かじゆまるさきしまはう其他の蔓莖植物は海水の多く及ばざる間に相混合して生育せり

椰子類の顯著なるものはびろうにして既に臺灣には多くを見る由なるも天孤島には何れの地方にも存在し住地沿岸一帯大茂林をなせしを知るに足るべし、沿岸乾燥地帯には、前記、あだん以下の樹木の外、やま

せるも明治四十三年頃始と伐採し盡したるを以て爾後甲信兩國材を使用せしが大正四年以降は主として北海道材を使用しつ、あ

四日市製紙會社は明治卅年静岡縣富士郡芝富村芝川工場を其後卅一年卅九年及大正二年の三回に亘り機械の増設を行ひ當初富士川及富士山麓の樺材を目的とせしも其後原料材不足を告げ北海道材及樺材を使用するに至れり中央製紙會社は明治卅九年岐阜縣中津町に工場を設け木曾川流域の樺材の外北海道及樺材を使用せり明治四拾年に至り東海製紙會社は静岡縣島田町に工場を設立し大井川筋の樺材及樺材及北海道材を使用しつ、あり本工場は木材パルプ製造事業の工場にして我國に於けるパルプ製造專業會社の嚆矢にして前述の如く本邦に於ける木材パルプの製造は明治廿二年に端緒を開き文化の進歩と國力の發展に伴ひ殊に日清日露の戦役は勿論先般の歐州戦亂は著しく斯業の隆盛を促進せしめ内地に於ける原料材は愈々供給不足を來し其傾向早くも北海道の原料材豊富なるに着目せしめ明治四十一年富士製紙會社は北海道江別町に江別工場を南富良野村に金山工場を建設し尚池田町に富士パルプ株式會社を増設をなし明治四十三年王子製紙會社は十勝苫小牧に分工場を設立し茲に初めてえぞ松と松を製紙原料となす端緒を開きたり其後内地に於ても木會興業會社は大正元年長野

すぎは最も大なる面積及蓄積を有し、もみつが、とがさはらを混じ、ひのき、あかまつの若干を見る可く、頂上には、びやくしを類あり、ほつ、じ、かなくぐのき、くろもじ、はいのき、やまぼうし、な、かまごりようぶ、じやくなげ、つげ等の温帯性活樹類副木をなせり、本帯は尙原生林の状態にあり、匡大なるものに富むを以て、利用上又森林帯研究上價値ある地方なりとす

第二期森林

(イ) 落葉活葉樹林

當地方の森林一度伐採、開墾、焼拂等を行ふときは一部の固有の林木萌芽して、舊林を作ると雖も多くは第一次にあかめかしはうらほろるのき、しまくろぎ、からすさんせう、せんだん、たらのき、あかみ、づき、いぬびは、やなきいちご、はごのき、ゑごのき等の一時的活葉樹類を生じ此間に固有の林木の漸時年度を經ると共に復活し來るを見るべく、伐採、焼拂頻繁に及ぶときは北部に於ては、くぬき、なら、かしは等の落葉活葉樹を生じ又竹原草原となり、或は松林に化成す、南部に於ては、くぬきとなり等を存せず、乾性常緑活葉樹類たるくろき、ひさかき、はまひさかき、伊集、しやりんばい等の森林及竹、草、羊齒原、及松林となる

(ロ) 松 林

大隅諸島には荒廢林野には黒松を生じ其狀態本土に於ける赤松と異らず、大島以南に

縣西筑摩郡大桑村須原に工場を設け更に大正參年擴張を行ひ木曾川流域の樺材及北海道樺材を使用しつ、あり九州製紙會社は大正二年に熊本縣入代郡上松求麻村に工場を設け樺材の使用を主とし内地材を附近に求めつ、あり記能製紙會社は和歌山縣宮町に工場を設立し木材パルプ製造を兼營し奈良縣十津川流域産材樺材を使用せしが一時中止し大正七年に至り熊野製紙會社と組織を改め兵庫大正マツチ工場より北海道及滿州産白楊材を購入しパルプの製造を行ひつ、あり其他三浦物産會社は高知縣幡多郡に木材パルプ工場ヲ設置シ明治四十五年より事業を開始し北越製紙會社も木材パルプの自製を始めつ、あり

斯くして我國に於ける木材パルプの製造は著しき發展を來し内地は己に其原料不足を告げ前述の如く各會社共現下盛に北海道及樺材より原料の供給を仰ぎつ、あり尙今後進で支那朝鮮に向て盛に發展すべく現に當會社(富士製紙會社)の如き上海漢口天津に派出所を設け最近シベリヤ方面に向て發展計劃中なり

隨 筆

護謨山に着くまで

(五月二十五日)漸く解放されてシंगाポールに上陸した吾々は一同に別れて迎に來た花屋ホテルの自動車に飛び乗つた、大きな石造や煉瓦造の家の立ち列んだ通りや異彩

を放つ装をした商店の打續いた通りを幾曲りかした、自働車は右方左方に澤山走つて居る、幾度か突き當りはせぬかと手に冷汗を握るのだつた、街路に植えられた熱帯植物は辻口に立つて居る巡査往來を行つたり來たりして居る様うな人何一つ吾々に取つて珍らしからぬものは無かつた、自働車はたどど止つた、見れば花屋ホテルであつた、ロビンソン、クルーソー、否、法人生活と云つた方がもつと適切だ、其を一週間續けた吾々は大いに氣力が削れて居た、花屋の二階の疊を敷いてお城室に通された時氣が弛んで倒れる様態に坐つた、暫くは無言で太息をつくのみだつた

もつとひどいそらだ、茲で驚いたのはゴム山の一言であつた、で吾々三井のゴム山つて一体何んな所か知つて居るか聞くとシンガポールから小蒸氣船に乗つて六七時間かゝるシヨール湖の山奥だと云ふのだ、内地ではシンガポールのゴム園シンガポールのゴム園と聞かされて來たので吾々のゴム園はシンガポールの郊外の廣々とした平野にゴムの木が植付けてあるのだと想像して居た、そして毎日シンガポール市から自働車で通ふんだ位に思つて居た、所が下女君の話によるとゴム山の人は毎日所か一年に一回も出ない位ですと云ふ是れを聞いては實に啞然たらざるを得なかつた、花屋ホテル附近は皆支那人の家であつた

命じた程なく持つて來たのを見ると七八寸大の綠色のものだ、「おいそんなに青いものが食べられるか」
「はい」とはビーサンイチャツ(ビーサンイチャツは馬來語にて綠色のバナ、と云ふ事)と云ふので青いが大變おいしいから喰べて御覽なさい」と云ふ、ではど取り上げて食つて見ると中々美味い、山と積れたビーサンイチャツも見る見る中に皮許りとなつた
「御飯が出来ました、何うぞ是からは食堂の方へ願ひます」といふ、言葉に従つて食堂へ行く、惜しい事に折角の御馳走もビーサン腹で澤山詰込む事が出来なかつた、食後にバナを出して呉れた、大きな形は内地の梨瓜の様であるが中の肉は眞紅で非常にうまかつた
又葉書を書き出した、二三本書いた僕はペンを投げ出して仰向になつた、暫く眼をひいて色々の事を考へて居たが余り外が騒々しいので起き上つて窓際に進んで街路を眺めた、自働車が頻りに通る、其には大抵赤い髪の毛が乗つて居る自分が見て居る間に日本人が一人も乗つて通らなかつたのが残念だ、人力車も盛んに通つて居る、車夫は弊衣破帽の支那人である、乗客は殆んど支那人だ、たまたま日本人も見受けた、シンガポールを白服を着て少しでも歩かうものなら汗でくしゃくしゃになつてしまふ

相だ、其で日中は大抵車に乗るんだ、そう云はれてよく見れば歩いて居るものは見苦しい装をした支那苦力が眞黒な上人許りだ、鐵輪の荷自轉車は物凄く音を立て通る、異様な叫び聲を立て、何か食物らしいものを賣歩く支那人も幾人とも通つた
五時半夕飯を終つた吾々は馬來語の本を買ふべくホテルを出た、主人に聞いた通り二三町行つて角を右に折れて一二町行くと其處には好文館といふ日本人の書店があつた、好文館の前には日本人の理髮屋があつた、買物を終つた三人は理髮屋に入つた、其處には静岡丸で一所に來たNとS氏が居た、驚いたのは理髮代の高い事だつた、福島町では山林學校生徒十錢也であつたのが此處では五十仙銀一箇を取つたS氏の勧めで夜のシンがポールを散歩した氏は先に立て案内した暫く見物して歩いたが僕が少し頭痛がしたと云つたので歸る事にした、是等の通りは毛唐や日本人や支那人や馬來人で歩く事も出来ない位だつた、ホテルに歸つて蒲團に潜り込んだが頭痛が次第に増し熱が段々高まつて苦しくて眠れない、一夜中悶へ通した(二十七日)硝子窓から明るい光線がさして來る頃から少し快くなつた、今日ゴム山に船が出ますが何うしますか」と番頭が聞きに來た、では其の船で行かると評議一決の後番頭に頼んでヘルメット帽を買つて來て貰つた、頭痛が少しよいので荷物を纏めて九時車を走らせて棧橋に向つ

た、吾々山行きのランチがあつたので早速飛び込んだ十時流儀と共にランチは吾々を最後の目的地に達せしむ可く静かに波を蹴り出した、其の頃から又烈しい頭痛に襲はれた僕は前に積んである荷物にはみついた、頭がじんぞと鳴つて居る、「君は晝飯は何うかね」と云はれて頭を上げて見ると吾船は今廣いシヨール湖を溯つて居た、兩岸にはマングローブが鬱蒼と茂つて居る辨當を開いたが食べられないので又はみついた頭痛が少しよくなると昨夜眠れなかつたのでつうとうと淡い眠に引き入れられた
「あれが三井のゴム山です」との聲が耳に入つたのはつと思つて頭を上げて見ると眼前にはゴムの木で被れた幾らもの丘が廣く現れて居た、昨夜來の頭痛は拭い取つた様に快くなつた、船が棧橋に着いた、時に四時二十分Y氏は會計課長のS氏と迎へに來て居た、目的地に着いたのだと云ふ事がいやに心臓の呼動を高めた、二氏に隨いて坂路を昇る事二町余りで事務所に着いた事務所は小な粗末な木造で室が三つしかない、一番廣い室に導かれた、其處には机がぎし／＼と列べられてあつて色の黒い眼鏡をかけた奴や髪を伸ばした奴が事務を勢つて居た僕等が入つて行くに皆が云ひ合した様に吾々を注視してやあ新米が來やがたら新米だけに俺より少し色が白いわい」と云つた様な顔つきをして居る、Y氏によつてK主

任に紹介された、K氏は今夜僕の所へ來る様にと云つた
其から順々あれは誰是れは誰と引き合はされたが一人も名を覺えなかつた、此方は只「宜しく御願致します」と云つて丁寧に頭を下げた、〇さんと云ふ人が吾々を獨身寄宿舎に案内した、そして三人の爲二室を與へた
又僕の想像に反した事があつた、否僕一人に限らない三人が三人共通だ外國だから事務所は勿論大理石が煉瓦造りの大きなもので吾々の宿舎も其相當の西洋間で毎日の食物は洋食だらうと思つて居たのだ
所が大違ひも甚だしい木造も簡單にも粗末極まるものだ洋食は洋食だ南洋食の南京米のばら／＼だ五時の鐘ががしん／＼と鳴ると黒い顔の先輩がゴムの林の中から歸つて來た其の誰彼の眼は一樣に此の新しい僕等に向つて注がれる、食堂で皆より先に夕飯を喫した吾々三人はK主任の家に行つた
最中だつた吾々は外の一室に通された
K主任の家には元老株が集つて何か話の眞
K主任は次の五ヶ條を注意して歸した
一、マラリヤ熱に注意する事
一、勉強する事
一、友人とは親密なる事
一、土人を丁寧使用する事
一、馬來語を早く記憶する事
聞けば朝は五時半に起床で六時就業との事に歸ると直ぐベットに横つた、目的地に着いた嬉しさに胸が一杯になつて眠らう眠ら

うと思ふが、眠れない、其の中に深い平和な眠におちた (終り)

一九一九、一一、三稿

虎の嘯を聞きつ、

I F 生

感想断片

何うかすると私は單に晴れ渡つた秋の空を仰いだけで無量の幸福を感じる事がある私達若い者の心程感激し易いものはない何物にも拘泥されず束縛されず真直に伸びて行かうとする若い純な心は此の感激に依つて育れて行く

感激は若い人々の生活の刺激劑である感激のない生活程苦痛であり又倦怠を生ずるものはないのみならず其の平凡な生誕から不備も生じて来るのだ感載の多い一生を送る人は幸福だ

緊張すべき時なるにもかかはらず此頃のだらけ切つた生活何一つ感載のない生活私の空虚な心は何物かを求めて居る

私達は何か爲しつゝ、あるか又は何物かを求めつゝ、あるか其の何れかでないれば一刻も満足に行く事が出来ない長野師範の實施して居る特別教育に置ける兒童の心理状態を研究した結果によると人間は三四才な幼い時から何物かを欲する心云ひ換ふれば心の空虚を満たそうとする欲求が非常に強いものだそうなる

どうしても人間と云ふ者は一刻もちつとじてゐる事は出来ないものらしい

空は晴れてゐるそうして空気が透明だ一時木曾谷一帯を紅に染めた紅葉も己に散り盡して其の残骸のみ寒さにふるへてゐる朝な() 白い呼吸をしながら太陽の上のものを保つて居る様な時になつた遠からず枕の原獨特の木嵐が吹きすさぶ日が到来するだらふ外套にくるまれ帽子目深にかひつてあの凍つた道を通はねならぬ日が又長く續く事だ火の消へたストーフを取り圍んでふるへて居る一團の生徒、陰惨な教室の有様を思ひ遣ると妙に身につまされる

卒業が近づいた社會は私達を待つて居るとして私達もひたすら其の社會に向つて突進してゐる自分と云ふ者を振りかへる暇なきまでにはびたすら突進して居る無論私達は社會へ()と突進しなければならぬけれども其の前に自分と云ふものを振りかへつて見る必要がないだらふか折檻、ソフトを注文する前に精神方面に於ける自己と云ふものを自覺して置く必要はないならぬだらうか何も身の榮達も不朽の名も築きたい譯でもないが然し私は兎に角三年間の教育を受けた専門的知識も受けられた相當の()勉強もしたが然し三年間の學校生活は只單にそれだけの事ではないか、それだけの事では決して社會に立つて行く根底にはならない私達をもつと深く自分と云ふものを知らない

つておく必要がある

今まで多くの卒業生は社會に立つて兎角相當の土臺を築き上げてゐる築き上げつゝ、あらゆる關係から私達も卒業させればどうにかなるだらう位の淺薄な考で来るべき卒業後の舞臺を期待して居りしはしないが自分と云ふものを深く追求せずに周囲の渦に巻かれやうとして居りしはしないかけれどもそれはあまりに情ない意氣地がなさすぎる私達をもつと自己を追求し凝視する必要がある私達が社會に出ると云ふ歡に満たされてゐる心の何處かに自分に對する不安が残つてはおらぬか何處かで自分をあざ笑つて居るものがあるいはしないか又封じた秘密はないか

何故とも知らず只此の頃自分は非常な焦燥にかられて居る何物かに追ひたてられる様なあはたしさを覺えて居るそれで居てもつとも心に満足を感じた事がないこんな肘でて周圍に捉はられ易いものだらうして自分以外のものに目標を置いて無茶苦茶に進んで行かふとする爲に始終煩悶したり焦慮したりする其處に少しも徹底した自己と云ふものを見出し得ないのが自分は悲しい若い人々の悲哀は重にこんな様な心理状態から轉換して起るものじやなからふか

人間は始めから終りまで平坦な道を歩みと

はしにするると云ふ事は到底不能な事だそれは人間性があまりに變化を好むからだ常に私等の心は新しきへ新らしきへ變つた方へ變つた方へと向つて居るあつちを向いてもこつちを向いても其處に何等の變化を認めない時は自ら進んでも變化を懇求するものだ此の性質が人間の弱點であり又強味ともなるものだ

と云ふ事は容易い事業(私は敢へて事業と云ふ)ではないだらうと想像される混沌たる社會組織の中で自分の歩んで来た跡を判然と認識する事の出来る様に生存して来た人生存して行く人々だけで立派な生存事業の成功者と云はなければならぬ

或區長では此處掛物があつた
太公秀吉公教訓
各毎朝可用一包 禁物之事 子孫延命藥
正直五兩 無理 善一心
思案四兩 意外 佛心道
堪忍三兩 過言 惡語記
分別二兩 無分 好物之事
用捨一兩 油斷 善一習
諸道叶 奇連嗜

見聞録

福井 延 畔

所謂縣廳の旦那さんになつて出張して歩く内にはイロんな勉強をする否さして呉れる茲には修養的のもの掲げる

或役場では此處掲示があつた

人の積り

一、深き積りにても淺きものは智慧なり

一、隠す積りにても顯はる、ものは惡事なり

一、云はぬ積りにても過ぎるものは惡口なり

一、健かな積りにても障るものは暴食なり

一、盡す積りにても届かぬものは孝行なり

一、多き積りにても少きものは分別なり

二十ヶ條

よくをたなれよ

大酒呑むべからず

朝寝すべからず

功に退屈すべからず

女に心ゆるすな

小成事も分別せよ

物あらひひするな

ふかくしあんせよ

我行術をおもへ

愚痴なる者におちよ

怒るものにおちよ

心に垣をせよ

人をいやしむべからず

樂身は苦い種と思へ

苦勞は樂の種とせよ

被官は家と家さめよ

貴人は無理なるものとせよ

人せつかんせば分別せよ

分別なきものにおちよ

文苑

柿の葉

鈴木静夫

ハラハラと静かに散れる柿の葉を拾ひて見たり秋は悲しも青白き月見てあれば誰か吹く尺八の音も悲しかりける。大空に飛び来る小鳥鮮なして木の葉の舞ふにさもにたるかな。霜月の山測量すれば落葉に境界標は埋もれてあり。バサバサと落葉ふむ音響ききて心にしむなる峠道かな。箱落ちし稻株の邊に小雀の落穂ついはむ秋の暮かな。霜深し霜落ちし朝に三尾人が熟せる柿を亦賣りに来る。降る雨に散るコスモスのはなびらに暮れ行く秋のけはひするかな。何時しれず過ぎて行くなる時なれば時は悲しむ時を戀しつ。くらへみてさて濁れりと歎くにはあまりに我は清くありけり。なんとなく涙ぐましく心地すは若さが故か愛のなやみか。秋たてば木木の木の葉は散るものをちらすすべなし胸の思ひは。

通信

種苗商より

第六回卒業生 蜂須賀宮治郎

○諸賢益々御清程奉慶賀候、一昨年十一月退官候で後生情にも空前の米價騰貴にてつわくし、食ひたい米も食ふこと能はず、柿の實杉の實に辛く命をつなぎ居候。○天道人を殺さずと申候ものか、昨秋は各種手何れも豊熟、ために其販賣高價賣二百石に垂んとし、枯るべき命も辛うじて濕ひ候、此れ偏へに卒業生諸賢の直接の御紹介及間接の御庇護の致せる所と感佩する處に御座候、一樹の蔭一河の流れ一倍々御引立の程を」と商人口調其儘に折入つて願上ぐる次第に候。○扱昨秋は何れの種子も其前年に比し需要倍或は數倍し候も就中其販路の順に増大し候來は合歡木に有之候該樹は瘠地にもよく生育し幹長二寸のもの根長よく四寸に達する深根性のものにして、アカシヤの如き刺を有せず候へば、川の兩岸等に於ける砂防用樹として最適のもの、宜や近來該用として盛に用ひらるること相成候、花は房狀にして美しく、俳聖芭蕉が「象潟や雨に西施が合歡の花」と吟じ候程可憐の情趣掬ひて餘あるものかも其葉は再重對生にして昏夜相合して眠に入り、且日漸くの開く特性有之此亦賞で、飽かざる風情有之候へば、何れの雅人にやさしくも合歡木と名付

十一月の辯論會より

小 縣 生

二十三日凍として潔よき霜は見渡す限り白く、朗晴を報じ、東の空金色射して杲々たる旭日、一點の翳なき空に現はれ、霜は益々皎々昌々として、表に白光を現はし、陰に紫の影を落しぬ。百五十の猛卒を入るに狭まからざる講堂に於て、我が辯論會は催されぬ、入り来る者皆希望に、血湧き肉躍るの者皆紅顔に現はれ、手足に現はれて何時しか壇上の人となりぬ、壇上の人皆、燈火に親しみ、机に爪立て、或ひは切齒して搾り出したる名論卓説、やがては壇上の花と化し、紅葉と變り

開會の辭

市岡巖君

我が杭の原、原頭に於て大光燭を舉げぬ、茲に聊か耳朶に刻せられし印象を記して、短き妄評を試みん。出發點に就て、今日の出發點として君の出發點として君の出發點の論説が最もふさはしい、場所慣れざりし爲か活氣乏しけれど、飽くまで慎重の態度を取り悠々として説ける所土出來、尙一層の修養を望む。さまよへる者よ、柳澤虎三君「アーメン」の野次襲來をも、ものともせず己れの感ずる所を、諄々として説く、特に君のスタイル、アクセント、たるや獨特君にして此の特徴あり益々奮はれよ、然し君をして今少し悠々たらしめよ、言語をして今少し末尾を明瞭ならしめよ。痛快と哀感、平出耕一君重々しき頭を振り、輕い調子で説く所眞面目先づ上出來の方なり、然し初陣なるを以つてか、音吐低く、亦君の明瞭より搾り出したる名文のため聴者をして、徹底せしめざるは残念なり。無茶苦茶、宮城吉雄君ぬかりの無い君の二つの目は、壇上に現はれた聴者は静寂を續けた、龜の甲より年の功どは良くも言へり、道に内容豊富にして時々は滑稽も交へて聴者を哄笑せしめ、倦く所をしらす、感服の外なし。山田憲夫君武士的徳性より醒めよ。

所感

石原 元君

發測たる活氣に溢れ、巧なる口舌は「人間は徳性を缺いたら人間として人間の價値なし」は初め初め説く所皆、快活にして明瞭男々しき兩眼は益々色彩を興へた、益々登壇あれよ、有望は益々接近すならん。あきらめ、安江鏡太郎君愛嬌満面にたへて「わたしや」の口頭に流暢なる論説は、先へ先へと進んだ、時には例を引き、時には解釋を加へたため、聴者の感む多く修養の一端たりしを謝す。説く所人生の努力にあり、克く沈着の態度を以つて、終始一貫せしは敬すべし、熱辯は君の長所か益々自重あれ。青年、立道乙松君悠々として壇上の人となるや、朗々として千量の秋を説く、論ずる所明快にして確然たるは感服の至り「以前驚きました話をして皆んなに野次られましたか」と平々凡々なる前置きをなした所は、記者も大賛成なり、宜しく平凡明瞭なるべし、而して君は、野次られましたが、のがれ力を得て克く満場を歴し野次連をして、默然ならしめしは、終始一貫君の熱辯に外はない。偶、本南克己君「諸君」と言ふ前置により、快爽なる口舌を輕活なる身体とにより、爛々と説き要領に入らんとせしが、半途にして斃る、益々練磨あれ。村上道信君

諸君宜しくのべし... 諸君の議論は、その妙を得た。...

静寂を續けた、眞摯の態度を取つて、扶活... 辯論を試みられしは、聴者の敬服する所なり。

大正八年十二月廿三日印刷 長野縣四筑郡...

共君の能辨は初まの... 妙論を飾り、此の兩者の勢を感せん。

矢崎清海君、下妻村妻籠に歸宅... 梅村計金君、山縣郡新見町に歸宅。

大正八年十二月廿三日印刷 長野縣松本市小柳町八十五番地

星加川正雄君、豫備役編入前隊に二引迄... 宮澤末雄君、松本市飯田河原十號地港屋。

七宮先生謝恩金領收報告... 金壹圓、金貳圓、金參圓、金肆圓、金伍圓。

【定價金參錢】